

東北大学医学部

後援会会報

No. 14
2015.3

発行：東北大学医学部後援会
編集委員会 平成27年3月

いま、改めて震災を思う



東北大学医学部後援会幹事
(宮城大学事業構想学部長)

徳永 幸之

東日本大震災から4年、そのときの新生も4年生となり、社会に旅立とうとしています。医学部では、あと2年学び続ける人も多いのですが、同学年の多くが社会人となるという意味では一つの区切りを迎えることになります。今の在校生には、震災前から医学を学ぶことを決めていた人も多いと思いますが、この震災が医学を志す契機になった人や医学としてだけでなく人として人や地域にどう関わるか改めて考え直す契機となった人も多いのではないのでしょうか。

震災復興計画では、復旧期から復興期に移る時期となっておりますが、防潮堤や斜面崩壊の復旧には未着手や途上のところもあり、新市街地や高台の整備にも時間を要し、未だに仮設住宅住まいのままであるなど復興にはまだまだ時間がかかる状況にあります。私も震災復興計画策定や避難計画、地域公共交通再編などに関わってきましたが、時間の経過とともに変わっていく住民意識や置かれた環境による意識の違いなど、改めて計画とその遂行の難しさを感じています。

津波被災地域では、人口減少や高齢化の問題とともに近隣の商店や病院がなくなるといった問題が深刻ですが、これは津波被災地域に限ったものではなく、震災前から東北地域全般で問題になっていたことであり、震災でそれが10年から20年分一気に進行したような状況にあり、それは仙台市内の団地でも起こっていることです。いつでも自由に車を使える人にとっては、郊外の大型店に行けば何でも揃い、病院も専門や評判によって選択が可能であり、今の生活にそんなに不満はないでしょう。しかし、このような「まち」は本当に暮らしやすい「まち」なのでしょう。震災の際に、ガソリンが手に入らず歩いて行けるお店の大切さを感じ、震災の際に車が渋滞で身動きがとれなくなり、徒歩で逃げないとだめだと皆が納得したはずではなかったのでしょうか。それからわずか1年9ヶ月後の地震で津波警報が発令されたとき、多くの人が車で逃げ、大渋滞となってしまいました。しかも、震災のときに徒歩で避難した人

までが車を使っていました。それは、震災のときは避難したあと車がなくて不便だった、あるいは、車を流されたくなかったという理由でした。このように人の意識は変わりやすく、他人や過去の教訓からは学びにくく、自分自身の直近のことが優先されてしまうことを改めて痛感させられました。

他人を思いやる心も震災のときは大いに発揮されていたはずですが、最近のアンケート調査でも残念な回答が多くありました。ある病院では、玄関が2階にあり、玄関スロープの傾斜が急なため、高齢者や歩行が困難な人のことを考え、バス停を2階の玄関前に設置しました。一方、車利用者も車いすの利用や歩行困難なために玄関前で乗降させていました。そこに、誰も乗っていないバスが来てクラクションを鳴らしたので、バス停はもとの1階に戻せという意見が何件も寄せられました。定刻を守りたいがためにクラクションを鳴らすバス側にも問題がありますが、お互いに自分のことが優先で相手のことを思いやる気持ちはどこに行ってしまったのでしょうか。



同じような事例はまだまだあり、医療現場においても同じようなことがいくつも思い浮かぶのではないのでしょうか。医学部では、知識や技術を学ぶだけでなく、惻隱の心など人間としても成長していくことが重要であります。そのためには、後援会がお役に立てればと思います。

バイオバンクを使った遺伝子研究と医療

東北大学医学部後援会幹事
(東北大学東北メディカル・メガバンク機構教授)

峯岸 直子



医学部のある東北大学星稜キャンパスの西端に、2015年夏に白い建物が完成しました。

南側の医学部6号館には、学生待望のグループ学習室が16室でき、年末年始の寒い時期でも試験を控えた学生が毎日遅くまで自習しています。



その北側の東北メディカル・メガバンク棟には、電算室、MRI室、NMR室、シーケンサー室、低温保管庫室(写真: 数万人分のDNAや血液試料を保管しています)、地域支援仙台センターなどの部屋があり、東北大学と岩手医科大学が実施する

東北メディカル・メガバンク計画の中心施設となっています。

本計画では、宮城県と岩手県の住民を対象に、コホート健康調査を行っており、調査に参加していただく方には、生活習慣などの情報とともに血液や尿をご提供いただき、個人を特定に繋がる情報を除いて匿名化した上で、バイオバンク(biobank 生体試料や情報を収集して分譲する施設)に保管しています。これらの生体試料や情報は、東北大学にとどまらず広く研究者に提供され、被災地域の健康状態の改善や全ゲノム情報に基づく次世代医療の実現を目指した研究などに使われる予定です。すでに、1,000人分の全ゲノム解析が行われ、その結果は日本人の遺伝子の特徴を代表するものとして広く研究者に活用されています。

ヒトゲノムの解読から12年経って、個人の全ゲノム情報が容易に得られる時代になりました。その結果、かなり多数の遺伝子とストレスなどの遺伝外因子の両方が疾患の発症に関わることが分かってきました。現在では、それぞ

れの原因遺伝子ごとに層別化して研究を進め、その人の遺伝子に応じた最適な治療法や予防法を見つけようという研究が盛んに行われています。31億対のDNAからなるヒトゲノムには個人間で0.1%程度の差異があり、その1,000万個以上ある変異の中から疾患の原因遺伝子を同定するため、より多くの人々の遺伝子を解析することが必要であり、世界各地にあるバイオバンク同士が協力することにより、このような研究をさらに発展させることが期待されています。

このような遺伝子解析技術を使った研究は日進月歩です。学部学生の皆さんが一人前の医療人となるころには、臨床検査として全ゲノム解析が行われ、遺伝情報に基づく診療が当たり前に行われる時代が確実に来るはずですが、そのような個人の遺伝子がすべて解析される時代を迎えるには、医療の中での遺伝情報の扱いに関する国民のコンセンサスが形成されていなければなりません。まだ発症していない重篤な疾患の原因遺伝子が、たまたま同定されてしまった場合は本人に教えるべきか(乳がんと違って予防や治療ができない疾患もあります)、疾患遺伝子を持つ人の子孫の問題(不利な遺伝子情報を知らずにいた人もいますが、親の遺伝子情報が分かれば知らずにいることは難しくなります)、特定の遺伝的素因や特徴を持つ人が社会生活上の不利益を被る可能性(生命保険加入、結婚、就職、人種や民族の差別など、社会の現実には理想どおりにはいきません。)等々、多くの課題について議論を深める必要があります。

このような遺伝子と医療について、たまにはご家庭の中で雑談してみたいかがでしょうか。20才前後の学生と家族がコミュニケーションを取ることは難しいかもしれませんが、遺伝子の知識は若い世代にかなわないかもしれませんが、社会経験は親の世代が数段上手です。学生にとってもご父兄にとっても結構良い刺激になると思います。

— 研究室 (分野) 紹介 —

医学科・免疫学分野

「免疫の仕組みの解明と疾患治療への応用」

医学部医学科

教授 石井 直人

● 麻疹や水痘などの感染症に一度かかると二度とかかることはありません。この現象は“二度罹りなし”として歴史書にも記載されており、現在では免疫記憶と呼ばれます。

免疫記憶は、ヒトをはじめとする高等生物の生体防御における最も重要な生体システムの一つです。ところが、免疫記憶がどのようなメカニズムで身体のどの場所で作られて

いるかは、ほとんど分かっていません。その秘密を解明するためには、数十年の寿命を持つと言われる記憶T細胞が、身体の中のどの場所で生み出されてどのように維持されているかを知る必要があります。私達は、その記憶T細胞についての研究を行っています。

● アレルギーが毎年同じ時期に発症するのは、免疫記憶がアレルギー物質を記憶していて、一度記憶されたアレルギー物質が再び体内に入ると免疫記憶が目覚まし、その物質を排除しようとするからです。同じように、関節リウマチなどの自己免疫疾患が再発したり慢性的に炎症を繰り返したりするのも免疫記憶があるからです。免疫記憶は、アレルギーや自己免疫疾患が繰り返される原因であると言えます。したがって、免疫記憶の制御方法が分かれば、アレルギーや関節リウマチなどの病気を治すことが可能となります。また、免疫記憶を自由に操作できれば、一回の接種で永久に効く夢のワクチンが開発できるかも知れません。そこで、私達の研究室では、私達自身が開発したいろいろな実験方法を用いて記憶T細胞の産生と維持を操作する方法を見つけようとしています。

私達はOX40リガンド(gp34)というTNF(腫瘍壊死因子)型分子を発見しました。それ以来10年に渡って研究を行ってきた結果、OX40リガンドが、記憶T細胞ができるための最も重要な因子の一つであることを突き止めました。(図1)

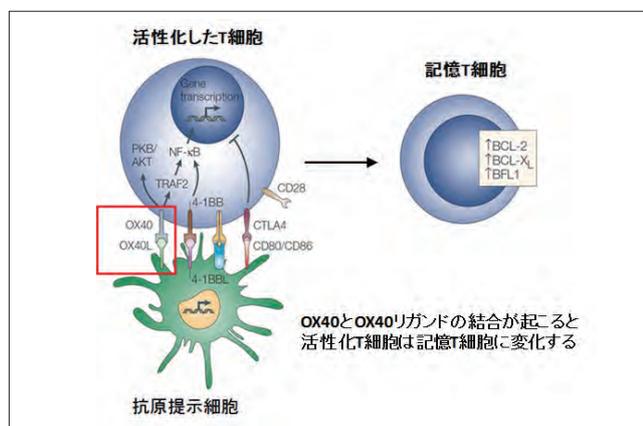


図1

一方、OX40リガンドとOX40受容体の結合が必要以上に過剰になると免疫記憶が強くなり過ぎて、アレルギーや自己免疫疾患を引き起こすことも分かりました。動物実験では、OX40受容体からのシグナルを人為的に遮断すると病気にかかわる記憶T細胞が働けなくなり、気管支喘息、関節リウマチ、多発性硬化症及びクローン病や潰瘍性大腸炎、さらには重症のインフルエンザ肺炎を治せることが分かってきました。また、OX40受容体とそっくりのTNF受容体型分子であるGITRやCD27という分子もOX40受容体と同様の働きを持つことが知られています。そこで、私達は現在、T細胞が持つ様々なTNF受容体型分子からのシグナルを制御することにより免疫記憶を操作し、アレルギー、自己免疫疾患及び炎症性腸疾患の治療法の開発を試みています。



図2：顕微鏡でT細胞を観察する医学科3年生

東北大学の建学精神の一つは「研究第一」です。研究は辛く厳しいものですが、その分、成し遂げたときに得られる充実感や達成感は素晴らしく、その素晴らしさは経験した人にしか分かりません。私達の分野では、医学科3年生の基礎医学修練や保健学科検査技術科学専攻の卒業研究で多くの学生を受け入れ、「研究第一」を実体験させています。

保健学科・看護アセスメント学分野

医学部保健学科保健学専攻

教授 丸山 良子
講師 菅野 恵美

近年の超高齢社会及び在宅療養の推進に伴い、療養環境は病院、医療福祉施設、在宅等と多岐にわたっております。看護の対象となる人々に対して、適切な日常生活の援助を行うためには、対象の状態や療養環境を鑑み、科学的根拠に基づいた看護援助技術が必要です。

当看護アセスメント学分野は、教授1名、講師1名、大学院生7名(博士前期課程1名、博士後期課程6名)、学

部学生6名(卒業研究)で構成され、生理学的指標を用いた看護技術やケアの検証、性ホルモンと自律神経活動の関連性、皮膚創傷治癒過程における免疫機構の解明に関する研究に精力的に取り組んでいます。中国からの留学生も在籍し、共に勉学に励む日々です。週1回のゼミでは、研究メンバーが研究の進捗状況や最新の科学的知見を報告し、活発なディスカッションを行い、さらなる研究の発展を目



指しています。今年度の卒業研究では、学部3年生の2月から約1年間をかけて「体位変換による自律神経の変化」、「出生体重と循環動態・自律神経活動の関連」、「皮膚創傷治癒過程におけるナチュラルキラーT細胞の役割」等のテーマに取り組み、非常に重要な結果が得ることができました。

実は、日常的に行われている看護技術のエビデンスは乏しく、経験的に行われているケアが少なくありません。そのため、近年、世界的にも実験的手法を用いた看護技術の検証の必要性が唱えられています。しかし、看護学において実験的研究に取り組んでいる大学は、全国的にもごく少数に限られ、東北大学は医学部や大学病院と連携し、未知なる課題にアプローチができる数少ない大学の一つで、共通機器室も充実しており、ハード面の環境も非常に整備されています。

私たちは、現在また未来の看護学には、『多職種とコラボレーションができ、共同で課題を検証する力』が求められていると考えます。当分野でも、形成外科学分野（館 正

弘 教授）や感染分子病態解析学分野（川上和義 教授、石井 恵子 准教授）と連携し、臨床に即した視点からのエビデンスの構築を目指しています。

本分野の卒業生、大学院修了生の就職先は、医療機関（看護師）、市町村（保健師）及び研究・教育機関（大学教員）など様々ですが、本分野で培ったリサーチマインドがどの領域でも発揮されていることを確信しています。

大学生活は、現在、自身が予想していない未来に続く「出会いの場」であると思います。学生の皆さんが興味あるテーマと出会い、発展させられるよう、サポートしていきたいと考えております。



平成 26 年度医学部オープンキャンパスを開催しました

医学部オープンキャンパス推進委員会

委員長

中谷 純
清水 律子
堂浦 克美

保健学科広報部会長

大学院修士課程長

平成 26 年 7 月 30 日（水）及び 31 日（木）の 2 日間、東北大学医学部・医学系研究科オープンキャンパスが星陵キャンパスにおいて開催されました。2 日目の正午、突然の雷雨には驚きましたが、学生実行委員、推進委員及び事務部が一体となって、昨年より 200 名近く多い 5,554 名の来場者をお迎えすることができました。

★医学科からの報告です。

今回も充実した企画を揃え、来場者に医学科をより深く理解してもらうことができるような内容となりました。「医学部案内ツアー」は、研究現場及び最新の研究・治療機器などを見学しましたが（右の写真）、例年通りとても



人気の高い企画でした。また、大学での講義や実習を体験する「模擬講義」、「実験実演コーナー」さらに良陵会館のスキルズ・ラボで「実技体験コーナー」及び「救急体験コーナー」を行いました。これらも大変好評でした。スキルズ・ラボでの体験の様子を下の写真に示しました。又、「ビデオ上映コーナー」では、医学科学生が高校生たちに解説



を行いながらの上映を行い、「入試体験コーナー」では、高校生からの様々な質問に答えましたが、いずれの企画にも多くの高校生が詰めかけました。震災復興関係でも「震災復興特別講演」が企画され、震災に対しての東北大学の取り組みが紹介されましたが、未来の医療を担う高校生たちにとって有意義なものとなったことと思います。加えて、「大学院コーナー」（ブース展示及び大学院企画模擬講義）を新たに企画するとともに、「加齢医学研究所」、「エコチル」、「災害科学国際研究所」及び「東北メディカル・メガバンク機構」からも出展があり、参加者にとって得るものの多いオープンキャンパスとなったことと思います。

★保健学科からの報告です。

「模擬講義」、「保健学科案内ツアー」、「実習体験コーナー」、「デモンストレーションコーナー」及び「展示コーナー」では、計 25 の企画を準備し、各専攻の特徴を分かりやすく理解できる機会を設けました。また、「保健学科入試・カリキュラム・卒後の進路等の相談コーナー」の他、「卒業生と語ろうコーナー」及び「在学生による入試体験談や学生生活相談コーナー」では、学部及び大学院生及び卒業生と触れ合う場を設け、卒業後の進路までをイメージしてもらえるように工夫しました。

看護学専攻では、多くの学生ボランティアの協力を得て、ツアーや実習体験コーナーなどを準備しました。参加者は、実際に新生児モデルに触ったり、看護の基礎的な技術を体験したり（下の写真）と様々な体験を楽しんでいました。

放射線技術科学専攻では、大学院生が中心となって実行委員会を組織し、ツアーやデモンストレーション及び模擬講義での専攻紹介を実施しました。また、模擬講義「画像診断学の進歩」及び「磁気で体の中を見てみよう」も分かりやすい講義で好評でした。



検査技術科学専攻でも、学生がツアーや展示を実施し、模擬講義も担当しました。展示コーナー（上の写真）では、検査の内容や学生生活について、ポスターを使って丁寧に説明していました。また、実習体験コーナーでは、卒研生や大学院生が実習指導や研究内容の説明を行いました。

★大学院医学系研究科からの報告です。

今回から、大学院医学系研究科紹介のコーナーを新たに設けました。大学院学生や教員による大学院紹介を行い、多くの高校生に参加していただきました。



2日間とも、夏らしい青空のもと、暑さに負けないくらい盛況なオープンキャンパスとなりました。最後に関係者を代表して、医学部後援会からのご援助を心から感謝申し上げます。

第 8 回リトリート大学院生研究発表会について

第 8 回リトリート大学院生研究発表会
実行委員会

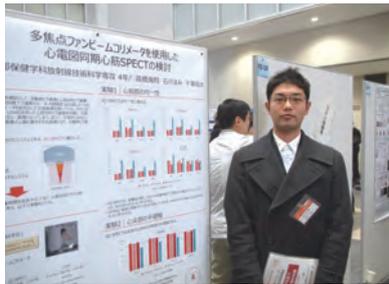
平成 27 年 1 月 17 日（土）に、医学部後援会のご支援により東北大学星陵キャンパス 6 号館において、『第 8 回リトリート大学院生研究発表会』を開催しました。

このリトリートは、医学系研究科の様々な研究室に所属する大学院生が集まり、主体となって役割や仕事の分担、会議などを取り仕切り、作り上げた研究発表会です。更に、

大学院生だけでなく医学部学生にも毎年参加して頂いております。第8回を迎えた今年度は、本研究発表会を通じて研究に対する熱い思いを共有し、将来の医学研究の発展に貢献するとともに、それらの発展を担うのは自分たちであり、その研究であることの再確認を目的に『次世代を担う若手研究者の挑戦～医学研究の最前線～』というテーマのもとに開催致しました。

今年度のリトリートは、去年の演題数を上回る92題（口頭発表25題、ポスター発表67題）、また、たくさんの方々に参加して頂き、所属している研究室の壁を越えての熱い議論や温かい交流などで溢れかえり、外が厳冬であることを忘れてしまうほどでした。

今年度は例年の会場である片平キャンパス「さくらホール」から、昨年新たに完成した星陵キャンパス医学部6号



館に会場を移動したことから、戸惑うことも多くありましたが、医学部・医学系研究科という一体感を例年以上に味わえた気がします。このリトリートが、医学系研究科内での垣根を超えた交流を生み、創造性や将来性のある研究の発展に繋がることを信じています。

また、本リトリートには毎回、医学部学生も積極的に参加して頂いており、今年度は2名が口頭発表、1名がポスター発表を行いました。大学院生顔負けの堂々とした大変素晴らしい研究発表であり、その活躍に対して医学部後援会から優秀学生賞が授与されました。

末筆ではございますが、本研究発表会の開催にあたり、ご支援、ご協力を賜りました皆様方並びにご来場頂きました皆様方に、この場をお借りして実行委員会一同心よりお礼申し上げます。



私の大学生活

医学部医学科3年
久岡 巧麻



東北大学に入学して3年が経ち、大学生活も折り返し地点が近づいてきました。

今年度は、中堅学年として、サークル活動や学校行事を運営する立場として関わることも多くありました。実際に運営すると、どういった活動をするか企画することに加え、様々な立場から出される意見を取りまとめる必要があり、ただ参加したり説明を聞いたりするだけではわからない側面が多くあることに気づきました。また、直接会う機会が少ない人とは、メールでのやり取りが多く、文面だけでうまく情報を伝えるためにはどのような表現が適切かを考えるのに悩むこともありました。大変なことも多かったのですが、物事を様々な視点から見たり、仲間と協力して何かを成し遂げたりと貴重な経験ができたと感じております。

カリキュラムの面でも、基礎医学の締めくくりにふさわしく充実した内容でした。学生実習では、各分野の先生方の指導の下で実験を行いました。現在では、当たり前となっている知識がどのようにして得られたか、実験手法の意味など座学で学んだことを実際に手を動かして確かめ、理解

を深めることができました。現在は、基礎系の研究室に配属されて半年間研究を行う基礎医学修練を実施しています。私は、遺伝子発現制御分野で細胞の初期化に、酸化ストレスに関連する遺伝子がどのような役割を果たしているかを調べるための実験を行っています。研究室で行う実験は、試薬の調整から始まり、すべての操作を自分で行います。遺伝子のはたらきを調べるにも、遺伝子を細胞に導入するためにプラスミドを用意したり、実験に用いるマウスの遺伝子型を調べたりする必要があります。そういった作業だけで一日が終わってしまうこともあり、きちんとデータが得られず、やり直しが必要になることもあります。一つの成果が得られるまでには、非常に地道な積み重ねがあるのだとわかりました。

学生生活も残り半分です。限られた時間を充実したものにできるよう様々な活動に挑戦していきたいと思います。また、来年からは、いよいよ臨床の授業が始まります。知識が患者さんの命に関わることを肝に銘じてしっかりと勉学に励みたいです。

東北大学に入学して

医学部保健学科放射線技術科学専攻1年

黒澤 彩



東北大学に入学してからの1年間はあっという間でした。期待と不安を抱きながら星陵キャンパスに足を踏み入れたあの時には、想像もつかなかったくらい充実した大学生活にもやっと慣れてきたように思えます。

私にとって、住み慣れた愛着のある仙台の地での大学生活は、どこか安心するものがありましたが、そんな中、最も変化したことは、医学部陸上部のマネージャーとして部活に参加していることです。もともと自分の運動神経が悪いことは自明だったため、運動部はもちろんスポーツに関わることも初めてでしたが、夏には、選手に負けにくい日焼けをするなど今では、選手の皆さんの練習に励む姿を見ながら、少しでも自分も何かに貢献したいという気持ちで笑顔あふれる部活にかかさず参加しています。

勉強面では、多種多様な一般教養科目に加えて、放射線物理学や解剖学などの専門科目も1年の内から学ぶことが出来るため、志を同じくする勉強熱心な友人に囲まれて、時には助け合いながら勉学に励んでいます。

ほかにもアルバイトでは働くことの難しさを教わったり、自動車学校に通って苦戦しながらも運転免許を取るなど新しいことにたくさん挑戦しました。

振り返ると、一年間に学んだどんなことも私にとってすべて勉強になっていると思います。様々なことに挑戦して、いろんな人と話すことによって将来の自分への課題や見習わなければならない点を発見していくことができ、大学生活で学べるものが将来の自分への糧になると信じています。

最後に、大学生になって特に感じることは、感謝の気持ちです。失敗したり、嬉しいことがあったりしたときに、いつも話を聞いてくれる家族や友人、周りの方々にこの場をお借りしてありがたいの気持ちを伝えたいのです。

とはいっても、大学生活はまだ始まったばかりです。残り3年間、自分への課題をたくさん見つけ、今まで以上に飛躍できるように、さまざまなことへ挑戦していきたいと思っています。

医学分館の学習用図書の整備・充実について

東北大学附属図書館医学分館長

丸山 芳夫

医学分館は、星陵キャンパスに所属する皆様方に、研究・教育に必要な図書、専門誌及び学習環境を遅延なく提供することを目的としています。医系の図書は、もともと単価が高く、改版も頻繁に行われるため、一度にすべてを整備することが難しい現状です。特に、新刊本をよく利用する学



生さんにとって、状況は満足できるものではありません。この点を踏まえて、昨年度に引き続き医学部後援会に嘆願依頼したところ、図書購入支援にご賛同いただき、これにより、医学分野『シンプル生化学』、看護分野『看護で役立つ診療に伴う技術と解剖生理』及び放射線技術分野『放

射線生物学』等含め、新刊本計87点の追加整備ができました。

自動貸出装置の導入、視聴覚資料や電子ブックの整備、国試・学習用図書コーナーの充実及び医学系データベースの講習会開催など、医学分館は継続的に改善が図られています。自学自習の場としての環境を鋭意整えつつ、医学分館館員一同、よりよいサービスの提供に日々努めており、皆様のご来館をお待ちしております。最後になりましたが、この度はご支援いただき、誠にありがとうございました。この場をお借りし感謝申し上げます。



東北大学医学部後援会主催「入学記念祝賀会」の御案内について

東北大学医学部医学科及び保健学科に入学する新入生及び保護者の方を対象とした「入学記念祝賀会」を右記のとおり開催いたします。

この祝賀会では、医学部教職員及び在学生による学科の紹介と説明及び在学中の勉学や学生生活などの様子についての懇談が行われます。

後援会会員の皆様におかれましては、会員同士が集う良い機会と思われまますので、会員同士お誘い合わせのうえ、御出席くださいますようお願いしております。

なお、当日は、東北大学全体の入学式（午前中）が行われますので、午後に会場を移動して開催されるものです。



医学部後援会 事務室

記

- 日 時：平成 27 年 4 月 3 日（金）
午後 1 時から（2 時間程度）
- 会 場：江陽グランドホテル・鳳凰の間
（仙台市青葉区本町 2 丁目 3-1 TEL:022-267-5111）
- 祝賀会の主な内容
 - 医学部長挨拶
 - 後援会会長挨拶
 - 来賓等の紹介・祝辞
 - 祝宴・懇談
 - 医学科及び保健学科の紹介・説明 など
 - 在学生からの歓迎挨拶 等々
- 会 費：無料です。
- その他：軽食及び飲み物を準備しております。
：事前のお申込みは不要です。

編集後記

仙台は、春間近です。

仙台市では、1987 年に開業した南北線に続く 2 本目の市営地下鉄として、2007 年 2 月に東西線が着工し、八木山から新井までの 13 駅、13、9 キロを 26 分で結び 1 日の利用を 8 万人と見込み、12 月の開業を目指しております。新路線は、100 万都市の中心市街地を挟んで東の田園地帯と西の学術・観光エリアを結ぶほか、南北線と交差して軌



道系交通ネットワークが十字を描き、沿岸開発や地域間交流の推進、道路の渋滞緩和といった波及効果に期待が高まっております。（河北新報から抜粋）

さて、まもなく新年度になり、希望と夢に溢れた新入生が東北大学医学部に入学してまいります。発足 8 年目を迎える医学部後援会は、新入生の皆様の入学を心からお慶び申し上げ、入学後の学生生活などの支援の一助を担えさせていただければと思っております。

本後援会は、学生への支援・助成活動 [入学記念祝賀会

開催、新入生オリエンテーション及びオープンキャンパスへの助成、学生用図書を整備・充実、卒業謝恩会への助成、後援会会報の発行 等々] などに積極的に取り組み、その活動の様子を年 2 回発行の後援会会報により会員（保護者）の皆様にお知らせしております。

また、学生、保護者そして本学部教職員との交流にも努めてまいります。

なお、後援会のさらなる発展・充実のために、会員の皆様からの寄稿をお待ちしております。御寄稿は郵便・電子メールで結構ですので、お寄せくださいますようお願い申し上げます。



医学部後援会 事務室



東北大学医学部後援会事務室

〒 980-8575 仙台市青葉区星陵町 2-1
TEL : 022-717-7870 E-mail : med-koen@med.tohoku.ac.jp
http://www.koen.med.tohoku.ac.jp/